

川崎病後の冠動脈病変の予後に関する検討

— 京都大学小児科入院例での成績 —

(分担研究：川崎病のサーベイランスとその解析に関する研究)

研究協力者：古庄巻史

共同研究者：吉林宗夫、米村俊哉

要旨：過去15年間に京都大学小児科に入院した川崎病症例のうち、その後経過観察し得ている185例について冠動脈病変の予後を検討した。(1) 川崎病急性期治療を受けた75例のうち、 γ グロブリン投与群と非投与群とで冠動脈病変の発生率を比較検討した。(2) 冠動脈造影を施行した110例について、その後の冠動脈病変の変化を後視的に検討した。その結果、(1) γ グロブリン投与群では非投与群と比較して冠動脈病変発生率は有意に低く、 γ グロブリンの冠動脈病変発生に対する抑制効果が示された。(2) 初回造影で拡大性病変のみを認めた冠動脈のうち48%が造影上正常化し、29%に狭窄性病変が新たに出現した。狭窄性病変の出現時期は、川崎病発症から1年以内が48%、3年以降が52%であり、最長は9年6か月後であった。冠動脈狭窄性病変は川崎病発症から長期経過後にも新たに出現する場合があります、川崎病後長期間の経過観察が必要と考えられた。

見出し語：川崎病、 γ グロブリン、冠動脈拡大性病変、冠動脈狭窄性病変、長期予後

目的：

(1)川崎病急性期における γ グロブリン大量静注療法の、冠動脈病変発生に対する抑制効果について後視的に検討する。

(2)冠動脈病変の遠隔期予後について、冠動脈造影(CAG)所見による後視的検討を行う。

方法：

(1)対象は、この15年間に京都大学小児科で急性期治療を受けた川崎病75症例中、完全分子型 γ グロブリン総量1g/kg以上を第7病日以前に治

療開始された31例(γ グロブリン投与群)、およびアスピリンのみによる治療を受けた21例(γ グロブリン非投与群)。 γ グロブリン投与群と非投与群の2群間で、心エコー図上の冠動脈病変出現率を比較検討した。2群間で年齢、性別に有意差はない。

(2)対象は、この15年間に京都大学小児科でCAGを受け、その後の経過を観察し得ている川崎病既往110例。110例中、24例で複数回のCAGを行った。24例中13例では2回、11例では3回の

京都大学小児科

CAGが施行されている。初回CAGから第2回CAGまでの期間は平均4年3か月(1年9か月から9年)、第2回CAGから第3回CAGまでの期間は平均4年6か月(7か月から8年2か月)である。これら24症例での左冠動脈前下行枝、回旋枝、右冠動脈の3冠動脈、計72冠動脈につき、遠隔期の冠動脈病変の予後をCAG所見により検討した。さらに、110例においてCAG上狭窄性病変が新たに出現した時期について検討した。

結果：

(1)γグロブリン投与群では31例中2例(6.5%)に、非投与群では21例中8例(38%)に冠動脈病変が出現した。γグロブリン投与群で非投与群と比較して有意に($P<0.02$)冠動脈病変出現率は低値であった。

(2)72冠動脈中、初回CAGで31冠動脈に拡大性病変のみが、8冠動脈に狭窄性病変(局所性狭窄2、セグメント狭窄2、閉塞4)が認められた。初回CAGで拡大性病変のみを認めた31冠動脈中、第2回CAGでは、15冠動脈が正常化、9冠動脈が不変、7冠動脈に狭窄性病変(局所性狭窄5、セグメント狭窄1、閉塞1)の新たな出現をみた。また、第2回CAGで拡大性病変のみを認めた9冠動脈のうち2冠動脈に第3回CAGで局所性狭窄が出現しており、初回CAGで拡大性病変のみを認めた31冠動脈のうち計9冠動脈(29%)において、その後狭窄性病変が新たに出現したことになる。

次に、狭窄性病変が出現した時期の検討では、経過中CAG上狭窄性病変を認めた29冠動脈中、14冠動脈(48%)が川崎病発症から1年以内、15冠動脈(52%)が発症から3年以降の出現であった。2冠動脈では9年以降に出現しており、最長は9年6か月後であった。

考察：

(1)川崎病急性期におけるγグロブリン大量静注療法の、冠動脈病変発生の抑制に対する有効性が示された。しかし本治療法を用いても冠動脈病変が発生する症例があり、注意を要する。
(2)CAG上冠動脈拡大性病変を有する症例では、長期経過後に狭窄性病変が新たに出現する場合があります。川崎病後長期間の経過観察が必要と考えられる。

文献：

- 1) Furusho K et al. High-dose intravenous gamma-globulin treatment for Kawasaki disease. Lancet 1984;ii:1055-1058.
- 2) 米村俊哉、吉林宗夫、古庄巻史ほか 当科で経験された川崎病例の予後の検討 -15年間のまとめ- Prog Med 1996;16:1776-1778.
- 3) 吉林宗夫、古庄巻史 循環器難病はどこまでわかったか -川崎病後遺症- Living Heart 1996; 11:4-7.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要旨:過去 15 年間に京都大学小児科に入院した川崎病症例のうち、その後経過観察し得ている 185 例について冠動脈病変の予後を検討した。(1)川崎病急性期治療を受けた 75 例のうち、 グロブリン投与群と非投与群とで冠動脈病変の発生率を比較検討した。(2)冠動脈造影を施行した 110 例について、その後の冠動脈病変の変化を後視的に検討した。その結果、(1) グロブリン投与群では非投与群と比較して冠動脈病変発生率は有意に低く、 グロブリンの冠動脈病変発生に対する抑制効果が示された。(2)初回造影で拡大性病変のみを認めた冠動脈のうち 48%が造影上正常化し、29%に狭窄性病変が新たに出現した。狭窄性病変の出現時期は、川崎病発症から 1 年以内が 48%、3 年以降が 52%であり、最長は 9 年 6 か月後であった。冠動脈狭窄性病変は川崎病発症から長期経過後にも新たに出現する場合があります、川崎病後長期間の経過観察が必要と考えられた。